

Let's Know Hiroshima Castle.

しろや！ 広島城



No.76

変わりゆく基町～天守が見つめた65年～

史跡広島城跡が立地している中区基町。広島城の南西側で巨大なサッカースタジアムの躯体が姿を現し、今後も三の丸部分の大規模な整備が予定されるなど、いま、その景観は大きく変わろうとしています。爆心地に近いこの町は、原爆によって灰燼に帰しましたが、広島市の中心として目覚ましい復興を遂げ、広島城天守は昭和33年(1958)の開館以来、65年にわたってその変化を見つめてきました。今回は天守からの眺望により、その移ろいをたどってみようと思います(現在の写真は令和5年(2023)4月9日撮影)。

なお、文中に使用する方角について、おおむね長方形を呈している史跡の長辺の軸方向は、実際には北から東方向に大きく振っているのですが、煩雑になるので、長辺・短辺の軸方向をそれぞれ南北・東西とします。また、官庁名などは当時のものです。



現在の天守から南西方向の様子。画面右寄りではサッカースタジアムの建設が進み、左寄りの堀の向こう側では三の丸部分の整備が始まっています。

広島城天守が開館するまでの基町

基町は、明治初期、南町、北町、西町などに分かれていた広島城域を明治20年(1887)に合わせて生まれた新しい町名です。この一帯では明治4年(1871)、本丸へ鎮西鎮台第一分営が置かれたのをはじめとして歩兵第11連隊など諸部

隊が編成され、軍関連の施設で埋め尽くされた軍用地として被爆・終戦の日を迎えました。

終戦後、軍用地は大蔵省所管の国有地となり、基町には早くから官公署が置かれ始めました。本丸の東側、現在の八丁堀北半部などには広島高等裁判所や広島高等検察庁など司法関係の

国の機関が昭和22年(1947)には置かれ、南半部には、霞町(現南区)の旧広島陸軍兵器補給廠にあった広島国税局、中国財務局、中国四国地方建設局などの国の出先機関を収容する施設の建設が計画されました(昭和35年(1960)完成。現広島合同庁舎1号館)。

城郭の北側では、東寄りにあった広島通信局の被爆建物を利用して昭和24年(1949)、広島郵政局及び電気通信局が設けられました。倒壊を免れた広島通信病院では被爆直後から被爆者の救護が始まり、病院としての機能が維持されました。その西側に広がっていた広大な広島陸軍幼年学校跡地には、東側に昭和20年(1945)10月に白島小学校が仮校舎で授業を始め、その西隣には同22年(1947)9月、広島市立中学校(現基町高等学校)が新築移転しました。

城郭の南側の西練兵場跡などの一帯には昭和25年(1950)ごろまでに広島郵便局、広島電報局、広島通商産業局、県の機関として広島復興事務所、市の機関として東部復興事務所、水道局などの官公署が置かれたほか、内堀に面したところでは、昭和24年(1949)開催のマッカーサー元帥杯競技大会を契機として広島市中央庭球場、その南側に社会保険広島市民病院(昭和27年(1952))が開設され、さらにその南側の広大な敷地には、霞町の広島陸軍兵器補給廠跡に移転していた広島県庁が建設されることになり、約2年の工期を経て昭和31年(1956)、完成しました。翌年には県庁の西側に広島バスセンターが開設されています。こうして基町のおおむね東半は官庁や公的機関などが集まる景観が形作



商工会議所から北を望む(昭和28年(1953)8月5日)
広島市公文書館提供

画面右、手前から市民広場、かまぼこ型の屋根の児童文化会館。左は広島護国神社社地、児童図書館。それらの向こうに木造の公的住宅が整然と並んでいます。撮影は広島城跡への方向ですが、天守はまだ再建されていないので見ることはできません。

られていきました。

広島城跡を含む、基町中央、西半を見ると、この地域は戦後の復興計画の中で計画された中央公園の大部分を占めていました。南側には、昭和23年(1948)には大ホールを備えた児童文化会館(現在のハノーバー庭園付近)や、遊具を備えた児童公園、小動物を飼育する施設なども設けられました。昭和27年(1952)には円形のガラス張りの建物として注目を集めた児童図書館(現在のこども文化科学館付近)が開館して、子どもたちの憩いや学びの場として整備が進みました。

南側の現在の相生通り沿いでは、西側の相生橋東詰めにあった広島商工会議所が応急修理の上利用されており、東隣には昭和24年(1949)に広島市中央公民館が開館しました。その北側、児童文化会館との間には市民広場と呼ばれた広い空き地があって、「こども博覧会」や移動動物園など様々な催しに利用されていました。市民広場の西隣には戦前から広島護国神社がありました。原爆によって社殿は倒壊、炎上しましたが、小祠を設けて祭祀を続けていたようです。昭和31年(1956)、広島城本丸内の現在地に移転しました。そして翌年7月、付近一帯の敷地に市民が熱望した広島市民球場が建設され、景観が大きく変化することとなりました。

一方、児童文化会館を挟んで北側、広島城跡の西側にあたる部分には、広島市をはじめ広島県などによって2000戸近い応急的な木造住宅が建設されており、特異な様相を見せていました。これらは早くも昭和30年(1955)ごろには老朽化が問題となり、河岸に密集していた不法建築対策ともあいまって、中央公園用地北部の公園用地からの除外、中高層住宅の建設という動きにつながっていきました。

昭和33年(1958)、広島復興大博覧会の会場の一つとして広島城天守が再建されたのは、広島城跡の周囲の景観がこのような変化を見せていた中でした。ここからは広島城が見つめ始めた景観の変化を方向ごとに追っていきたいと思います。

(本号で掲載している写真は、特に注記がある場合及び現在のものを除き、大段徳市氏撮影、広島市市民局文化振興課のご所蔵です。)

南西方向

まずは冒頭でみた南西方向を見てみましょう。

①



①の撮影は昭和46年(1971)12月1日。写真中央に見える三角屋根の建物は先代の広島県立体育館。左手に見える白っぽい建物の県立屋内プールなどとともに体育関連施設が昭和37年(1962)から同44年(1969)にかけて一帯に整備されました。奥に見える高いビルは昭和39年(1964)建設の広島商工会議所。今も現役です。一方右に目をやると密集した木造住宅とともに、多くの自動車がとめられているのが目を引きまします。各家庭に自動車が普及していたことがわかります。城跡のすぐ西側を通過する現国道54号はまだできていません(この付近では昭和48年(1973)末ごろには供用が始まったようです)。

②



②は昭和50年(1975)9月2日。城内が公園らしく整備されるとともに、道を挟んで向こう側も植樹が進んでいますが、まだ住宅が残っているのもわかります。

西方向(やや北向き)

続いては西方向。③は昭和45年(1970)12月5日の撮影。老朽化した木造住宅の除却や、高層住宅の建設などを内容とする基町地区の再開発事業はすでに昭和44年(1969)に着工して



いましたが、この時期はいまだたくさん旧来の住宅が残っています。中央に見える高木は被爆樹木のクス。現在も樹勢よく枝を広げていますが、高層住宅の建設により、天守からは見えなくなりました。右手の白っぽい建物は昭和41年(1966)開業のスケート場、ヒロシマアリーナ。ボウリング場も併設されました。今は営業を終



えて、跡地はスーパーになっています。④は昭和48年(1973)年3月の撮影。住宅の除却が進み、高層住宅が順次建設されていきます。現国道54号の整備が進められています。⑤は現在。基町再開発事業が昭和53年(1978)に完成してから天守から西への眺望はほとんど失われました。



まだまだ別方向を見ていきたいところですが、紙幅が尽きたのでまた改めて。

(大室謙二)

コラム —これからの広島城— 広島城トークイベント

昨年12月、「知っていますか？本当の広島城を。～市民が知らない広島城のチカラ～」と題し、広島城トークイベントを開催しました。ご登壇いただいた先生方には、城の構造や歴史など様々な面から広島城の魅力を存分に語っていただきました。参加者からは、広島に住んでいるのに知らなかったことがたくさんあったという声が寄せられました。

今回は、トークイベントで取り上げきれなかった広島城に関する質問について、三浦先生、秋山先生にお答えいただきました。



トークイベントの様子

【出演者】

広島大学名誉教授 三浦正幸 氏
県立広島大学名誉教授 秋山伸隆 氏
城郭ライター・編集者 萩原さちこ 氏
城郭模型作家 島充 氏

質問1 広島城は他の城郭と比較してどのような特徴があるの？

回答：三浦先生

多くありすぎて、容易には語れません。例の少ない完全な平城であって築城年代に比べて著しく先進的だったこと、本丸をはじめ城内の有効面積が広大で

あって超巨大城郭だったこと、大小天守は関ヶ原以前で全国最大であり、戦災時において現存最古だったこと、飾りだけの千鳥破風を付けた日本初の天守で、日本初の先進的な重階一致天守だったこと、櫓の数が全国最多級だったことなど、きりがありません。

質問2 広島城が原爆で倒壊せずに残っていたら国宝になっていたと思いますか？（※）

回答：三浦先生

現在の国宝天守と比べても非常に価値の高い国宝です。

※戦前の国宝保存法の下で、広島城天守は国宝に指定されていた。原爆で倒壊し失われたため、戦後に指定が解除された。

質問3 広島城の築城に黒田官兵衛が関与したという説は本当？

回答：秋山先生

黒田官兵衛が広島築城に関与したという説は、『陰徳太平記』などの江戸時代の記録を根拠とするものだと思います。確実な史料による裏付けを欠いており、信頼に足るものとは思えません。

質問4 築城の際に輝元が周辺の山から見立てをしたという説は本当？

回答：秋山先生

江戸時代に作成された「山県氏覚書」「広島開基」などに、天正17年（1589）2月、毛利輝元が二葉山・比治山・己斐松山に登って城地を見立てたと記されています。しかし「佐東普請」＝広島築城は、天正16年（1588）12月の時点で既定の方針として家臣に伝えられていますので（井原家文書）、17年2月に輝元が周辺の山に登って城地を見立てたという事実はないと思います（『図説広島市史』235頁、広島市、1989年）。

（広島市市民局文化スポーツ部文化振興課広島城活性化担当）

しろうや！

広島城

編集・発行

公益財団法人広島市文化財団
広島城

〒730-0011
広島市中区基町21-1
電話：082-221-7512
FAX：082-221-7519

令和5年6月10日発行

広島城利用案内

開館時間：9：00～18：00

（12月～2月は9：00～17：00）

入館の受付は閉館の30分前まで

入館料：大人370円（280円） 中学生以下無料

高校生相当・シニア（65歳以上）180円（100円）

（ ）内は30名以上の団体料金

休館日：12月29日～12月31日（臨時休館あり）

ホームページ <https://www.rijo-castle.jp>